

2023. 1. 1 (日) ヨハネ 6 : 51 ~ 58

6:51 わたしは、天から下って来た生けるパンです。だれでもこのパンを食べるなら、永遠に生きています。そして、わたしが与えるパンは、世のいのちのための、わたしの肉です。」

6:52 それで、ユダヤ人たちは、「この人は、どうやって自分の肉を、私たちに与えて食べさせることができるのか」と互いに激しい議論を始めた。

6:53 イエスは彼らに言われた。「まことに、まことに、あなたがたに言います。人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたがたのうちに、いのちはありません。

6:54 わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠のいのちを持っています。わたしは終わりの日にその人をよみがえらせます。

6:55 わたしの肉はまことの食べ物、わたしの血はまことの飲み物なのです。

6:56 わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、わたしのうちにとどまり、わたしもその人のうちにとどまります。

6:57 生ける父がわたしを遣わし、わたしが父によって生きているように、わたしを食べる者も、わたしによって生きるのです。

6:58 これは天から下って来たパンです。先祖が食べて、なお死んだようなものではありません。このパンを食べる者は永遠に生きています。」

<説教>

〈ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。〉(ヨハネ 1:14a)先主日にはこのように聞きました。「ことばが人となった」とは、神であるお方(主イエス・キリスト)が人となった、ということです。「人」と訳された言葉の直訳は「肉」です(欄外注)。「ことばが人となった」とは、「神であるお方が神であることをやめないで、神であるまま、私たちと同じ人間の肉を採った、肉をまとった」ということです。これをキリスト教用語としては「受肉」と言います。ただし、イエスが採られた「肉」は、私たち生まれながらの人、神ではなく人に過ぎない者たちのような罪に汚れた「肉」ではありませんでした。その思いと行いにおいて完全に神に従う、罪無き「肉」でした。そういう「肉」をお取りになって、人となって、イエスは〈初めに神とともにおられた〉(1:2)天からこの世に、地上に生まれて来てくださいました。そのことを、本日朗読されたところで、「わたしは、天から下って来た」(6:51)とイエスは言われました。

〈わたしは、天から下って来た生けるパンです。だれでもこのパンを食べるなら、永遠に生きています。そして、わたしが与えるパンは、世のいのちのための、わたしの肉です。〉(51) 51 節はイエスのことばの途中からであり、この箇所よりも前からイエスご自身が〈天から下って来た生けるパン〉であることをお話しになっていました。直前、「わたしはいのちのパンです。あなたがたの先祖たちは荒野でマナを食べたが、死にました。しかし、これは天から下って来たパンで、それを食べると死ぬことはありません。」(48-50)、「わたしの父が、あなたがたに天からのパンを与えてくださるのです。神のパンは、天から下って来て、世にいのちを与えるものなのです。」(32-33)、「わたしがいのちのパンです。」(35)、「わたしが天から下って来たのは、」(38)というように。

なお、イエスがここで「パン」の話しをなさったのは、6章の始めから読めば分かるが、

大麦のパン五つと、魚二匹をもって、それを増やし、男だけで五千人の人々に彼らが望むだけ分け与え、十分食べさせたことに端を発しています。それで人々はイエスを王として（自分たちの食欲を満たし、その他あらゆる欲望を満たしてくれる、都合の良い、この世の王）として担ぎ上げようとしてしました。それに対してイエスは〈なくなってしまう食べ物〉ではない〈いつまでもなくならない、永遠のいのちに至る食べ物〉があることをお示しになりました（27）。ユダヤ人は「私たちの先祖は、荒野でマナを食べました。」と言って、自分たちが特別な神の民であることを間違って誇っていました。神がマナを食べさせてくださったのは、「人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばで生きる」（マタイ 4:4）ということをつかせるためでした（申命記 8:3）。しかし、ついにその人を永遠に生かす「神のことば」、〈いのちのパン〉、〈生けるパン〉、〈だれでも…食べるなら、永遠に生き〉るパンであるイエスが〈天から下って来た〉のに、イエスをそういうお方としては信じようとせず、ただ自分たちの欲望を満たしてくれるこの世の王としてしか受け入れようとしませんでした。

しかしイエスが〈肉となって〉〈天から下って来た〉のは、〈いのちのパン〉〈生けるパン〉としてご自分の〈肉〉を〈世〉に与えるため、そうやって〈世〉に〈永遠に生きる〉〈いのち〉を与えるためでした（51）。〈世〉とは、〈自分の背きと罪の中に死んでいた者〉（エペソ 2:1）、〈自分の肉の欲のままに生き、肉と心の望むことを行い、…生まれながら御怒りを受けるべき子ら〉（同 2:3）、即ち私たち人間のことです。〈わたしが与えるパンは、…わたしの肉です〉と言われたように、イエスがご自分の〈肉〉を〈与える〉とはどういうことか。それは、イエスが私たちの罪のために、罪深い私たちの身代わりに、私たちの罪の赦しのために、十字架で死なれてご自分の〈肉〉を裂き、〈血〉を流して、ご自分を生きた聖なる従順のささげものとして神にお献げになるということです。事実、現実として〈世〉の、古今東西、文字通りすべての人が〈この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々〉（1:12）となるわけではありません。それでも、イエスが十字架上で神にお献げになる、神への完全な従順の捧げもの、罪のためのいけにえとしての死には、文字通り古今東西すべての人のいのちを贖うのに十分な効力、功績があるのです。

そんな〈生けるパン〉、イエスが与える〈肉〉を〈食べる〉とはどういうことでしょうか。それは、「私の罪のために十字架で死なれたイエスを受け入れる、信じる。」ということにほかなりません。53 節以降、〈人の子の肉を食べ、その血を飲む〉（53）、〈わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む〉（54,56）とは、要するに「イエスを信じる」ということです。ですから、57 節では〈わたしを食べる〉、また 58 節では〈このパン（もちろんイエスのこと）を食べる〉と端的に言われました。「食べる」＝「信じる」です。イエスをあざけり、「この人は、どうやって…できるのか。」「できるはずがない。してはならない。」とイエスを信じようとしないユダヤ人にはそのことが分からなかったようで、文字通り「食べる」「飲む」ことだとしか考えられなかったようです（52. cf.60,66）。

しかし、たとえ「比喩的」だとしてもイエスがわざわざ「食べる」「飲む」という言葉をお使いになったことを決して無視してはなりません。特に 54,55,57,58 節の「食べる」という言葉は、獣がむしゃむしゃバリバリと音を立てて食べる食べ方を表しています。その意味では決して「上品な」言葉ではありませんが、それ故そこには非常な「リアルさ」が表されています。一つには食べられる側の肉が裂かれ、血が流される、つまり食べる側

のために殺される、死ぬ、そうやって食べる側に「いのちを与える」という現実です。それは確かに〈私たちの罪のために〉十字架で肉を裂かれ、血を流して殺される義人イエスの現実のでした（もちろんイエスはその後よみがえらされました）。そして一方、食べる側からすれば、食べた物が文字通り「肉となり血となって」自分のいのちの養いとなる、「ああ、いのちを戴いた。感謝なことだ」という現実です。それは確かに私たちがイエスを信じて罪の赦しを戴き、イエスにある永遠のいのちを戴き、〈終わりの日に…よみがえらせ〉(54)られて〈永遠に生き〉る希望を戴いたことについての感謝と喜びの現実です。それは、私たちがイエスのうちにとどまり、イエスも私たちのうちにとどまる(56)という現実、「もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。今私が肉において生きているいのちは、私を愛し、私のためにご自分を与えてくださった、神の御子に対する信仰によるのです。」(ガラテヤ 2:20)という現実、イエスと一体、イエスの骨からの骨、肉からの肉 (cf.創世記 2:23)という現実です。要するに、「私たちはイエスの肉を食べ、イエスの血を飲む者たちだ、イエスのいのちを戴いて、イエスのいのちによって生きる者たちだ、イエス・キリストのからだなのだ」という現実です。

今日も、そしてこれからも、「取って食べなさい。これはわたしのからだです。」と言われてパンを食べ、「みな、この杯から飲みなさい。…わたしの契約の血です。」と言われて杯を飲む聖餐式において私たちが信じ、確認し続けるべき現実はこれなのです。